

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2019年度 活動報告書



こんな時だからこそ、さらにきずなを深めたい

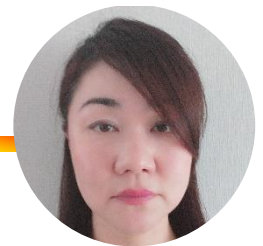


レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之

今年度の「みんなの家きずなハウス」も、おかげさまで月 1,000 名を超える皆様にご利用いただきました。名物『ポーちゃん焼き』は、様々な雑誌で紹介されるなどして、七ヶ浜ブランドとして定着してきた感があります。また、各種企画として、きずなネットやファームガーデンでの多彩な活動に加え、きずな食堂、ちゃせご、出張きずなハウスと、町内を駆け巡って、地域や世代を超えた交流を深めたり、被災者の心の復興に寄与したりして参りました。こうした NPO ならではの積極的な活動が展開できた背景に、熱い想いを持った地元中高生らの参画があったことは、将来の明るい話題として特筆しておきたいと思います。また、福島県などから避難された方々の課題は、月日の経過とともに、より個別化・複雑化・深刻化しています。「震災や原発事故さえなかったら」と、今この瞬間もやり場のな

い無念さや今後の暮らしへの不安に苛まれる「一人ひとり」に向き合いつつ、より身近で安心できる拠り所につながるなどの支援に取り組んでおります。ところが、年度終盤にかけて、新型コロナウイルス感染症が世界中に蔓延する非常事態となりました。9 年目の 3.11 追悼式は、断腸の思いで参列を自粛しました。新型コロナウイルス感染症は人々の健康を奪うだけではありません。震災当初から私たちが一番大切にしてきた人と人とが触れ合う場も手と手を携える活動をも奪いました。今は一日も早い終息を願うばかりですが、ただ祈るだけではなく、「心まで奪われてなるものか」と、お手紙や電話、IT も駆使するなど知恵を絞り、むしろこんな時だからこそ、絆が深まる活動に心がけたいと考えています。皆様方の引き続きのご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

「んだっちゃ！」想いのバトンを渡していこう



レスキューストックヤード常務理事 浦野 愛

2011 年 3 月 25 日に初めて七ヶ浜の地を踏み始めてから、10 年目を迎えました。

本年度、きずなハウスは、新しい取り組みとして「んだっちゃ塾」を開催しました。町民の方々はこの場を通じて、互いの震災の体験談を共有しながら、どんなに時間が流れ、世代が変わっても『子どもたちのために残したい言葉』を紡ぎ始めました。また、震災の記憶がかすかに残る F プロの皆さんは、きずな F プロと共に、語り部や紙芝

居を通じて、町の小学生や全国各地の人たちに、震災体験や教訓を伝え続けています。こんな風に、未来につながる希望の芽は、町の至るところで、確実に育ちつつあることを実感しています。

RSY は、皆さんの育つ力を少しでも応援できるよう、もう 1 年頑張ります。そして、新型コロナウイルス感染症なんかに負けないぞ！

七ヶ浜町の概要と震災による被害

七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約1.9万人、面積は約13.2km²

名前の通り、「七つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛んです。

「しょうぶたはま 菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り混じった土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人避暑地だった歴史から造られた「七ヶ浜国際村」では、地元の子ども達を中心としたミュージカル劇団がつけられています。



2011年3月11日、東日本大震災で震度5強の地震後、最大12.1mの津波が襲来
菖蒲田浜地区を中心に沿岸の集落に被害

津波浸水面積 4.8 km² (町域面積の 36.4%)

死者 108 名、行方不明者 2 名

住家被害は全壊 674 棟、大規模半壊 237 棟、半壊 413 棟、一部損壊 2,605 棟

町内 36 か所の避難所にピーク時で 6,143 名の町民が避難

七ヶ浜町の復興状況

町内全ての応急仮設住宅は2016年度末に閉所され、一昨年には菖蒲田浜海水浴場のフルオープン、昨年には七ヶ浜町観光交流センターがオープンするなど、ハード面での復興は大詰めを迎えようとしています。災害公営住宅や防災集団移転住宅での暮らしも、落ち着いてきた一方で、震災から9年経ち、生活環境の変化や高齢化など、個人それぞれで不安を抱える方もいます。以下は、各住宅の整備戸数と入居状況です。

【高台住宅団地 (防災集団移転促進事業)】 5か所 194戸整備完了
整備・再建状況[2020/3/10現在]

- 1 松ヶ浜西原地区 : 整備戸数 13
- 2 菖蒲田浜中田地区 : 整備戸数 30
- 3 笹山地区 : 整備戸数 128
- 4 吉田浜台地区 : 整備戸数 9
- 5 代ヶ崎浜立花地区 : 整備戸数 14

整備戸数計 194 (着工192・再建192)

※再建戸数は、住宅完成後、高台住宅団地に住所を映した戸数

【災害公営住宅 (災害公営住宅整備事業)】 5か所 212戸整備完了
整備・入居状況[2020/3/1現在]

- 1 松ヶ浜地区 : 整備戸数 32 (入居 30)
- 2 菖蒲田浜地区 : 整備戸数 100 (入居 98)
- 3 花淵浜地区 : 整備戸数 50 (入居 47)
- 4 吉田浜地区 : 整備戸数 6 (入居 6)
- 5 代ヶ崎浜地区 : 整備戸数 24 (入居 23)

整備戸数計 212 (入居戸数 204)

きずなハウス 2019 年度の活動

2019 年	4/24	仙台港重油漏れ事故に伴うノリ支援募金お届け
	5/6	花洲浜復興記念ウォークラリー協賛
	5/30	グリーンカーテンワークショップ（ゴーヤカーテン）開催
	6/26	人権啓発講演会、写真展@国際村
	7/13	グリーンカーテンワークショップ（アサガオ）開催
	7/28	Happiness ワークショップ@きずなハウス
	8/3	おりおり（きずなネット）による、藍の生葉染めワークショップ開催①
	8/17	松ヶ浜地区夏祭りに出店
	9/15	第1回「んだっちゃ塾」開催（テーマ：津波）
	9/16	おりおり（きずなネット）による、藍の生葉染めワークショップ開催②
	9/21, 29	ファームガーデン活用講座「ハンモックづくり」開催
	9/22	金城学院大学七ヶ浜訪問受け入れ
	10/16	きずな食堂@松ヶ浜開催
	10/20	「あさひ園祭り」にて仙台白百合女子大学ボランティアとともに、くじ引きブースを担当
	11/9	第2回「んだっちゃ塾」開催（テーマ：避難行動）
	11/10	SEVEN BEACH MARKET ワークショップ@きずなハウス
	11/16	「菖蒲田浜地区ぼっけ汁祭り」に協力（ぼっけのポーちゃん焼き出店など）
	11/23	被災地学習・交流日帰りバスツアー実施
	11/27	松ヶ浜花の和（きずなネット）台湾交流参加
	12/1	沖縄美ら海水族館提供イベント協力
	12/5	亦楽小学校2年生校外学習受け入れ
	12/8	ファームガーデン活用講座「かまどベンチを使ったワークショップ」開催
	12/15	花洲浜クリスマス交流会に協力
	12/17	きずなネット等住民意見交換会開催
12/24	きずな公園美化活動実施	
2020 年	1/18	第3回「んだっちゃ塾」開催（テーマ：避難所生活）
	2/6	復興みなさん会との被災地学習・交流@七ヶ浜
	2/8	笹山ちゃせごの開催、代ヶ崎浜もちつき大会に協力
	2/22	菖蒲田浜ちゃせごの開催
	2/23	第4回「んだっちゃ塾」開催（テーマ：仮設住宅）
	2/29	きずなハウスフェスティバル開催
	3/11	東日本大震災七ヶ浜町追悼式に記帳・献花
		きずなハウスでのオレンジフラッグ掲揚

きずなハウス 定期開催の活動

- ・きずなネット会議の定期開催（2か月に1回程度）
- ・出張きずなハウスの開催（毎週金曜）
- ・社協各地区お茶会、きずな喫茶 in 松ヶ浜への参加
- ・きずなFプロミーティング（2か月に1回程度）への協力

名古屋事務局 2019 年度の活動

- | | | |
|--------|-------|--|
| 2019 年 | 5/6 | 第4回 FOR 子ども支援～広域避難の子どもたちの夢の実現を！・贈呈式 |
| | 6/23 | 甲状腺検診&交流相談会（岐阜） |
| | 9/27 | 東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）主催「3.11の今がわかる会議 in 名古屋」の運営補助 |
| | 11/16 | ふくしまとあなたをつなぐ交流・相談会（福島） |
| 2020 年 | 1/1 | 元旦募金（被災地全般支援金） |
| | 3/11 | 東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや WEB 開催・実行委員参画
（※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一堂に会しての式典は中止） |
| | 3/19 | 岐阜県における避難者支援連携会議 |

【ご寄付】① 株式会社ファミリーマート様

今年度も、株式会社ファミリーマート様より、「七ヶ浜みんなの家きずなハウス」に寄付のご協力をいただきました。私たちに託していただいた大切なお金は、子ども達が楽しく参加できるイベントや、きずなハウスで居心地よく過ごせるような環境の整備等、きずなハウスの運営費に充てさせていただきました。スタッフ一同、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



水に浮かぶ？不思議なアートワークショップの様子

【ご寄付】② 物資寄贈 ほか

住友化学株式会社三沢工場様からは、日用品のご提供をいただきました。いただいた物資は、七ヶ浜町社会福祉協議会主催の地区の新年会でお配りし、ご高齢者の皆様に大変喜ばれました。また、明治ホールディングス株式会社株主の皆さまからは、子ども達へお菓子等を寄贈いただき、RSYが行った世代間交流企画などで配り、とても喜ばれました。スタッフ一同、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

七ヶ浜みんなの家きずなハウス（概要）

2017年7月21日、仮設店舗商店街「七の市」跡地に、『七ヶ浜みんなの家きずなハウス』をリニューアルオープンしました。建設にあたっては、RSYの活動にご賛同いただいた株式会社ロレックス、株式会社サークルKサンクス（現株式会社ファミリーマート）、NPO法人HOME-FOR-ALLをはじめ、多くの皆様から、多大なるご寄付、ご協力をいただきました。完成後、『きずなハウス』は町に寄贈され、町との協定のもとRSYが運営を担っています。



豊かな緑に囲まれた
「七ヶ浜みんなの家きずなハウス」

ハウス内には、豊富な種類の駄菓子や飲料等を販売する一画を設け、昔懐かしい「スマートボール」とともに、日々、沢山の子ども達を迎え入れています。他にも、宿題をしにくる子、友達との待ち合わせ場所に使う子など、いろいろな形で活用されています。



誰でも、気軽に集えるコミュニティスペース

また、ガラス張りの店内には、木製のテーブルやベンチがあり、午前中や昼過ぎ頃は、ご年配の方々や小さなお子様を連れたママさん達が訪れ、「七ヶ

浜ファームガーデン」と名付けたきずなハウス前庭の豊かな緑を眺めながら、ゆったりした時間を過ごされています。

このように七ヶ浜の住民の皆様、憩いの場として利用していただくとともに、きずなネット（P.8参照）の活動拠点として、ワークショップの開催や町内外のボランティアの方たちの受け入れの場としても利用されています。

加えて、SNSでの情報発信や、ブランド七ヶ浜（※1）に認定された、きずなハウスの名物『ぼっけのポーちゃん焼き（※2）』の人気もあいまって、町外から訪れる方も多く、きずなハウスは、世代や地域を超えた方々が、出会い、つながる場として、月1,000人を超える方々が訪れています。

また今年度は、かまどベンチや雨水タンクを新たに設置しました。子ども達をはじめ住民の皆様と、環境や自然について学びながら、災害にも強い、人づくり・まちづくりにつなげていきたいと思えます。

今後も、町の復興を見守る地域の活動拠点として、『みんな』の温かな交流が生まれる場所を目指します。

※1 七ヶ浜の地場産品等を、町が「ブランド七ヶ浜」として認定し、情報発信することにより、七ヶ浜町の知名度向上と地場産業の振興を図るもの。

※2 七ヶ浜の特産魚「ぼっけ」を観光キャラクター化した『ポーちゃん』を模した、たい焼き風焼き菓子



かまどベンチを使った防災クッキング

きずなハウスを活用した他団体によるイベント開催

Happiness

“子どもも大人も作る！遊ぶ！食べる！”をテーマに、親子で楽しめること、夏休みの思い出作りになること、世代や地域交流の促進が目的だったため、きずなハウスにぴったりの内容でした。RSYは、7月28日（日）の開催に向けて、町内の小中学校へ配布するチラシの手続きや広報のサポートをしました。町外の団体が、きずなハウスの敷地を使ってイベントを行うというのは初めてでしたが、当日は、それぞれのブースに集まるたくさんのお客さんで賑わいました。来場者が描いた、大きな白布に自由に書き込んだ作品やチョークアート作品は、きずなハウス内に展示し、長く楽しむことができました。



SEA HOUSE project

町外に住みながら、積極的に海でのイベントやビーチクリーン活動をしている団体。「緑に囲まれ、子ども達が遊びに来て、人が自然に集まる場所に魅力を感じた」ということで、キーホルダーやグラスサンドアートなどのハンドメイド企画で町を盛り上げたいとイベント開催の相談がありました。RSYとしても、きずなハウスの活用法を広く知ってもらえること、このイベントを通じ、貨物船重油流出事故で被害に遭われた生産者を応援するという主旨に賛同し、全面的にサポートしました。



そして、11月10日（日）に、SEVEN BEACH MARKET ワークショップフェアを開催し、手作りに興味や関心を持つ住民やきずなハウスのお客さんがワークショップを楽しむ姿とたくさん笑顔が見られ、交流人口の増加を感じました。

アイリブループプロジェクト

東日本大震災で亡くなった当時6歳の佐藤愛梨ちゃんの花（フランスギク）を通じて、命の大切さを未来に繋げるプロジェクト。「アイリブルー」とは、愛梨ちゃんが好きだった青空にちなんで名づけられたそうです。RSYも震災の記憶の風化防止の活動を応援しており、プロジェクトの代表とのご縁から、10月に松ヶ浜地区避難所で行った交流会で「被災地に咲いた奇跡の花の物語」を上映しました。それを観て地区の方々がプロジェクトに参加し、松ヶ浜地区災害公営住宅の公園の花壇に苗を植えました。翌月には、きずなハウス前のファームガーデンにも苗を植え、花壇を作りました。花が咲くのを楽しみに、想いを込めて育てていきたいと思ひます。



宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業 ～地元ボランティア団体等の活動サポート～

発足 3 年目のきずなネットは、地元ボランティアで手づくりの活動をしている団体が仲間入りし、全部で 10 団体となりました。

今年度の事業の目的の一つは、「地域活動ネットワーク きずなネットの推進」。活動の基盤となるきずなネット会議は年 4 回実施し、情報共有の場として通算 12 回を数え定例化しました。また、各団体独自の活動に取り組む中で、藍の生葉染めや地区避難所の清掃活動、紙芝居の制作上演、台湾との国際交流など、昨年度から継続・発展し、活動の充実と交流人口の増加が顕著にあらわれる取り組みもありました。特に、中学生が毎年継続している清掃活動は定着しつつあり、高校生が自主制作した紙芝居による震災の風化防止活動は、町内外に大きな反響を呼ぶなど、若い世代の躍動が広く地域住民を巻き込む活動となったと思います。

ファームガーデンの環境整備ときずなハウスでの活動プログラムでは、住民による「グリーンサポーターズ」とともに、ゴーヤとアサガオのグリーンカーテン設置、手づくりのハンモック設置、かまどベンチを使った 3 つのワークショップを実施しました。被災 3 県の市民活動団体との交流では、東松島市野蒜地区^{のびる}を訪問し、野蒜まちづくり協議会から新しいコミュニティづくりの事例報告などの話を伺いました。また、一昨年視察した南三陸町の復興みなさん会を七ヶ浜町にお招きし、これからの支援の在り方等情報共有をすることもできました。



中学生による清掃活動



小学校での紙芝居上映



一昨年からの夢、ハンモック完成！

二つ目には、「安心して暮らせるまちづくりへの支援」として、東日本大震災の記憶の風化防止企画「んだっちゃ塾」を全 4 回開催し、4 つのテーマごとに語り部の話を聴き、グループトークから未来へ伝えたいことを模索しました。震災から 9 年、時間の経過とともに記憶も薄れていることの認識



第 4 回んだっちゃ塾でメッセージ記入

をあらたにし、参加者は皆、伝えていくことの大切さを感じたようでした。毎回 15 名前後の参加でしたが、2 グループに分けてのトークは、全員が話すことができ時間が足りなくなる程盛り上がりました。そして、「後世へ伝えたいメッセージ」を、オレンジフラッグに書き、きずなハウスに掲げました。もともとオレンジフラッグは、防災集団移転の笹山地区で取り組まれているもので、災害時に視認性の高いオレンジ色を目印に掲げ、避難誘導を促すという活動です。フラッグは、毎年 3 月 11 日に掲げ、震災の風化防止と防災への意識の啓発にも役立てていきたいと思っています。



3.11 オレンジフラッグを掲げる

また、沿岸被災地区との交流を深めるため、松ヶ浜地区避難所の公園と菖蒲田浜災害公営住宅広場をファームガーデンのサテライト花壇と位置付けて、入居者の方々と一緒に花の苗や球根を植えました。住民の方々は、水やりのお世話をしてくれたり、様子を見に来てくれたりしています。晩秋の活動でしたが、春にはフリージアとムスカリが芽を出し、長く楽しんでいただけたと思います。

グリーンサポーターズが町の緑化推進事業に応募し、ゴーヤのグリーンカーテン設置が実現しました。これにより、地元の業者とつながり、ハンモック設置の際の土台となる枕木の提供や、ファームガーデンの樹木の管理へも協力をいただきました。



サテライト花壇／菖蒲田浜災害公営住宅

アサガオのグリーンカーテンは、東北大学大学院の先生から苗とプランター、松ヶ浜の農家の方からは、珍しいアサガオの鉢ごと提供をいただきました。みやぎ花いっぱいコンクールにも応募し、「仮設住宅・災害公営住宅コミュニティづくり賞」と、さまざまな花のタネをいただきました。砂地だったファームガーデンも年々緑が増え始め、フランネルソウやコスモスの苗、自宅で増え過ぎた草花を提供してくれる方もいました。おかげで、今年初めてモグラが生息したと思われる土の隆起を発見し、「少しずつ肥沃な土になってきた証拠だね」と、皆で喜び合いました。緑でいっぱいのファームガーデンに地元の皆さんの関心が高まり、訪れる人々の癒しになるとともに、自分達でも楽しいプログラムを考えていけるようにサポートしていきたいと思っています。



ファームガーデンにコスモスの苗植え

被災者支援総合交付金を活用した「心の復興」事業 ～災害公営住宅及び高台住宅団地（防災集団移転団地）移転者支援～

七ヶ浜町では、2016 年度末に町内全ての応急仮設住宅が閉所され、現在では町内 5 地区に整備された災害公営住宅 212 戸と高台住宅団地 194 戸への移転が完了しています。

移転先は、町の施策により、なるべく震災前に住んでいた地区に戻るよう配慮されています。移転先での新しい生活にも慣れてきた一方で、震災から 9 年経ち、災害公営住宅の高齢化率は、一番高いところで 100%、全体では 43.3%（令和 2 年 3 月 31 日現在）となり、それに伴う、引きこもりや生活不活発病などが心配されます。

RSY では、七ヶ浜町を通じ、復興庁の被災者支援総合交付金を活用した「心の復興」事業の補助金を受け、災害公営住宅と周辺地域、高台住宅団地での多世代交流やコミュニティづくりの促進を目的に、今年度は「思いやりが育む地域の力・生きがいの場作り」を応援する事業に取り組みました。

主に、災害公営住宅での引きこもり防止や人とのつながり、役割づくりへとつながるよう、料理作りや交流企画を取り入れた食事交流会「きずな食堂」（全 4 回開催、約 370 名参加）と、地区や地域全体の復興への機運を高める交流企画（全 2 回開催、延べ約 120 名参加）を実施しました。実施にあたっては、地区の有志により実行委員会を立ち上げるなど、企画立案や当日の運営を、住民が主体となって進められるよう努めました。

なかでも、子ども達が福の神に扮し、災害公営住宅や高台移転団地を一軒一軒訪れ、地区での交流会のお誘いや「無病息災」を祈願した折り鶴を手渡した「ちゃせご」（※3）は、日頃から家にこもりがちな高齢者の生活状況をお伺いすることができました。また、地区と子ども達との間に「顔見知り」の関係もでき、地域での見守り体制のきっかけづくりにもなりました。

【2019 年度 取り組み一覧】

日付	取組名	実施場所	参加者数
2019/10/16	きずな食堂@松ヶ浜	松ヶ浜地区避難所	50 名
2019/11/16	菖蒲田浜地区ぼっけ汁祭り	菖蒲田浜地区避難所	約 140 名
2019/12/15	花淵浜クリスマス交流会	花淵浜地区避難所	約 80 名
2019/12/24	きずな公園美化活動	きずな公園	6 名
2020/2/8	代ヶ崎浜地区もちつき大会	代ヶ崎浜地区避難所	約 100 名
2020/2/8	笹山ちゃせご	笹山地区避難所	33 名
2020/2/22	菖蒲田浜ちゃせご	菖蒲田浜地区災害公営住宅及び 中田地区防災集団移転地	77 名
通年度	出張きずなハウス	町内全災害公営住宅 5 ヶ所	延べ 214 名
		合計	約 690 名

また、移動サロンカー「きずな号」(※4)を活用して、災害公営住宅を対象に、移動喫茶「出張きずなハウス」を行いました。参加者同士が、気軽にいろいろな会話を楽しまれるとともに、最近見かけない方や気になる方については、お宅を訪問し見守り体制の一助となるよう努めました。町内の全災害公営住宅5ヶ所で年度を通して計34回開催し、延べ214名の方の参加がありました。

いずれの企画においても、区長さんを始めとして、各地区の婦人会、子ども会などの皆様からご協力をいただき、地域としての取り組みになったと思います。また、地元中高生や小学生にも参加やお手伝いをしてもらうことで、幅広い世代が交流できる機会になったと思います。

今後も本事業を通じて、生きがいや役割づくり、孤立の防止につながるよう、継続してまいります。



「きずな食堂@松ヶ浜」での
向洋中学校Fプロジェクトによる斉唱



福の神に扮し、一軒一軒訪問する子ども達



菖蒲田浜地区ぼっかけ汁祭りの様子



「出張きずなハウス」の様子

- ※3 昭和30年代頃まで、宮城県内各地で行われていた伝統行事で、小正月に子ども達が福の神に扮し、近隣の家々を回って福をもたらし、そのお礼としてお餅やみかん、お菓子をもらったという風習。
- ※4 震災により、図書センター等の被災や仮設住宅での生活などで、子ども達が落ち着いて勉強できる場が減ってしまったため、2015年に移動学び舎バスとして制作・運用開始。これまで、移動学び舎、フィールドワークや釣り体験、災害公営住宅でのお茶会などに利用。現在では、七ヶ浜町民の交流にも活用されている。

愛知県被災者支援センター

東日本大震災および原発事故によって愛知に避難された方は、未だに約 335 世帯 860 名（2020 年 3 月現在）います。この 1 年で約 15 世帯が避難者登録を解除しており、定住を決めて「もう避難者ではない」という方がいる一方で、愛知での暮らしに馴染めないことや、生活が安定しないことにより帰還を選択した方もいます。県は 2011 年 6 月からセンターを設置しており、RSY は運営団体として支援を継続。主な活動は、情報紙「あおぞら」の発行、定期便の送付、専門家と連携した相談会や交流会の開催、相談対応、個別訪問や各地域での支援体制づくりです。

センターは現在、これまでに把握した個別情報をもとに、孤立や生活困窮、心や身体の病気など深刻な課題を複数抱え、継続的な支援が必要となる要支援者 14 世帯への支援に力を入れています。地域とのつながりが希薄で孤独感を抱える中、健康状態の悪化により生活機能も著しく下がった高齢独居世帯のケースでは、行政や社会福祉協議会、病院、ボランティア等と連携し、入院およびその人に合った施設への入所サポートをしました。その他にも、住居や仕事が安定せず生活困窮に陥っている単身男性や、家族それぞれが仕事や学校、健康等への不安を抱える外国人世帯もあります。すぐに解決には結びつきませんが、地域の支援関係者の理解や協力を得ながら個別支援に取り組んでいます。

また、これまで要支援でなかった方が、住宅支援の終了といった支援の変化や、子どもの成長や高齢化といった家族の変化などに影響され、暮らしが一変してしまうこともあります。そのため、全世帯の情報を整理した一覧表を作成し、気になる世帯に対して電話や個別訪問で現状を把握、必要に応じて支援につなげていく「積極的見守り」活動を今年度から始めました。2018～19 年度に住宅支援が終了した世帯（34 世帯）の中には、生活が厳しくなり家賃の安い転居先を探している世帯や、福島県から案内された支援情報を取り違え、必要のない転居をしてしまった世帯もありました。母子父子避難・家庭（64 世帯）の場合は、目の前の子育てと生活に精一杯で、健康にまで気を遣えず、甲状腺検査を受けられていない世帯が多く、愛知県民主医療機関連合会とセンター共催の「甲状腺エコー検診&交流相談会」への声掛けを丁寧に行いました。65 歳以上の世帯（66 世帯）は、元気に働く方がいる一方で、急に体調を崩したり、パートナーが亡くなって生活困窮や孤立してしまう方もいました。外国人世帯（26 世帯）の場合は、母語ではないセンタースタッフからの電話に、問題があっても「大丈夫」と返答されるため、外国人ヘルプライン東海と連携し状況把握をしています。これからも一人ひとりに寄り添った支援を継続していきたいと考えています。



甲状腺エコー検診（左）&交流相談会（右）の様子

FOR 子ども支援基金～広域避難の子どもたちの夢の実現を！～

東日本大震災および原発事故により、故郷や家族と離れての避難生活や、避難先が変わる度に転校するといったことは、子どもたちにも大きな負担となりました。そんな中、避難生活で悩む親の姿に気を遣うなど、様々なことを我慢している子どもの声を聴いたことから、東海3県に避難した子どもたちを応援する基金を創設。「身近な願いや将来の夢」をテーマに作文や絵を募り、夢を叶えるために必要なものを贈呈しています。

震災から8年が経過した第4回目は、14人の願いを叶えることができました。「卓球選手になりたい」と書いた小学6年生には卓球道具セットを、



「母のような介護士をめざしたい。災害時には、困っている人のために積極的に動ける人になりたい」と書いた高校1年生には自転車を、「地元南相馬を襲った津波のシミュレーションで、恐ろしさを伝えたい」と書いた高校3年生にはパソコンを贈りました。そして、「私の夢は助産師。耳に障がいがある私だからこそできる仕事がある」と書き、電子聴診器を贈った高校生からは、実現に向けた一歩となる大学への進学が決まったという嬉しい報告もありました。これからも子どもたちの成長を見守り、未来へのチャレンジを応援していきます。



RSY ふくしま支援室

福島県から岐阜県・三重県に避難されている方々の支援を目的に、2016年度から「ふくしま支援室」を開設しています。

主な活動は、①相談窓口の開設②戸別訪問の実施③避難先及び福島県内での交流相談会の開催などです。今年度、相談窓口へは、生活・健康・帰還など12件の質問が寄せられ、行政・専門家などへ確認の後に回答致しました。戸別訪問は、9世帯を訪問

し、一人ひとりのご要望や生活状況を尋ね、孤立防止と寄せ添った支援を目指しました。交流相談会では、避難者交流に留まらず、健康に対する不安やADR申立てなどの要望に応える形で、岐阜では甲状腺検診を、福島ではADR相談会を行い、岐阜会場は7世帯22名、福島会場は14世帯26名の方の参加がありました。



行政・専門家による個別相談

健康や将来の不安に寄り添う
甲状腺健診&交流会

東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや

RSY や各区の災害ボランティア団体などで構成する「なごや防災ボラネット」が運営協力している「東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや」は、名古屋市が設置し名古屋市社会福祉協議会ボランティアセンターが 2011 年 4 月 14 日から運営しています。設置から年数が経つにつれ、高齢の方の生活問題、健康問題や子どもの不登校、夫婦間の悩みなど新たな課題が出てきていますが、社会福祉協議会やボランティアの強みを活かした支援をおこなっています。必要に応じてケース会議も開いています。

被災者の方の自主活動「革工芸の会」や名古屋工業大学の「寺子屋」・愛知淑徳大 CCC の「学習支援」も好評でした。お茶っこサロンでは、昨年好評だったボーリング大会を実施し、夏休みの 1 日を

楽しんでいただきました。恒例の「餅つき」は新型コロナウイルス感染症の影響で中止になってしまいました。今後も「寄り添い、ゆっくりと、でも全力で応援します」をモットーに、引き続きニーズに合わせた支援を行っていきます。



「革工芸の会」平日昼間の開催のため参加者が少ないですが、和やかな雰囲気です

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）は 592 の支援団体が加入するネットワーク組織で、現在は被災 3 県の支援団体と連携しながら、被災地の課題を全国に発信し、全国の支援団体が東日本大震災に関われるきっかけを作っています。また、広域避難者支援においては、避難先における支援体制の強化にも力を入れています。



JCN ツアー in 福島に参加いただいた時の様子
（福島第 1 原子力発電所前にて）

RSY は、当団体の世話団体として継続的に JCN の活動に助言や協力をいただいております。2019 年度は JCN と RSY で「3.11 の今がわかる会議 in 名古屋」を共催し、東北 3 県の支援団体と RSY からご紹介いただいた地元の支援団体と一緒に東日本大震災の課題について議論する場を作ることができました。また、広域避難者支援においては、岐阜市で行政、社協、NPO が集まる場を JCN と RSY で一緒につくり、岐阜県に避難されている方への今後の支援体制を検討する機会を設けることができました。

こうして一緒に動くことで東日本大震災の知見が共有され、南海トラフへの対策へとつながればと考えています。

寄稿：JCN スタッフ 杉村



3.11 の今がわかる会議 in 名古屋で、東北の登壇者と愛知県の支援団体が意見を交わす様子



七ヶ浜町長 寺澤 薫さん

レスキューストックヤードの皆様には、震災直後から本町の復旧・復興に多大なご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

東日本大震災から9年が経過し、本町の復興事業にもようやくゴールが見え始め、復興後のまちの姿がはっきりと目に見えるようになってまいりました。これもレスキューストックヤードの皆様をはじめ

め、多くの方々のご支援、ご協力の賜物であり、この場をお借りし深く感謝を申し上げます。

今後とも町民の「心の復興」に向けた取り組みとともに、町の将来を見据え、お互いの心が通い合い、だれもが健やかで幸せな日々が送れるよう「心かよう健幸のまちづくり」を推進してまいりますので、皆様のお力添えをお願い申し上げます。



七ヶ浜町社会福祉協議会会長 阿部 和夫さん

レスキューストックヤードの皆さまには、九年間の長きに亘り七ヶ浜町での支援活動をして頂いております事、深く感謝を申し上げます。

木々や草花が植栽され、環境が整備された「きずなハウス」を活動拠点とし、様々なワークショップやネットワーク構築事業を展開されております。相変わらず老若男女が集い、笑い声が絶えない交流の場となっております

また、災害公営住宅のある地域におきましては、「出張きずなハウス」を週一回のペースで開設し、

中央公民館まで来れない人達のために、喫茶コーナーやぼっけのポーちゃん焼、駄菓子の販売を続けられております。レスキューストックヤードの皆さまには私ども社協事業の「サロン活動」や「ふれあい広場あさひ園まつり」にも毎回、物心両面でご協力を頂いております事、改めて感謝を申し上げます。

栗田暢之代表理事をはじめ、きずなハウススタッフの皆さま、名古屋スタッフの皆さまのご健康とご多幸をご祈念いたします。



七ヶ浜町民（防災集団移転） 高橋 理恵さん

きずなハウスの皆様には、いつも大変お世話になっております。菖蒲田浜地区子ども会では、2018年度から「ちゃせご」でお世話になっております。分かりやすく言うと、日本版ハロウィンのお正月バージョンのような、小正月に行われた伝統行事だそうです。地域の子も達が福の神となって家々を回る…といった内容です。実際、子ども会ではきずなハウスさんで用意いただいた七福神の衣装を着て地

区を回りました。2019年度には「ちゃせご隊」と書かれた折り鶴を持ち、家内安全・無病息災・商売繁盛をわいわいと和やかに福を届けました。地域の皆さんとも交流ができた、とても貴重な機会となりました。

きずなハウスさんとの繋がりでより一層、地域の皆さんと子ども達のかかわりが増えて感謝でいっぱいです。ありがとうございました。



松ヶ浜災害公営住宅在住 丹野 正徳さん、洋子さん

早いもので、あの震災から9年が過ぎました。避難所生活から仮設住宅、そして現在の災害公営住宅に至る迄の間、レスキューストックヤードの皆様には大変お世話になりました。感謝いたしております。ともすれば、落ち込みがちな気持ちが大変助かりました。私達夫婦2人は松ヶ浜災害公営住宅に入居しております

が、此处でのきずな号によるコーヒーサロンそして見学会、また、避難所に於けるボランティアさん達との交流イベント等、楽しい事が沢山ありました。ご近所のひと達も大変喜んでおります。これからもコミュニティを大切にしていくためにも、ご協力をよろしくお願いします。ありがとうございました。



きずなネット（向洋中学校Fプロジェクト） 渡邊 聖南さん

向洋中Fプロジェクトは、ふるさと・復興・フューチャーの3つのFを掲げて活動しています。主な活動は、町内で催される交流会などにボランティアとして参加し、お手伝いすることです。ボランティア活動のなかでも、きずな食堂@松ヶ浜は多くの生徒が参加し、地域の方々と交流を図ることができました。今後は、もっと多くの生徒に参加してもらい、ボランティ

ア活動に興味を持ってもらえるように、呼び掛けに力を入れていきたいです。また、私たちは震災について学び、復興のために、ふるさとのために何かできることをしたいという気持ちで活動しています。自分たちができることを考え、人とのつながりを大切にして意欲的に活動に取り組んでいきたいです。



きずなネット（きずなFプロジェクト） 紀野國 七海さん

東日本大震災から9年が経ち、町の景観も震災当時と比べてますます復旧・復興が進んでいるように思います。私たち「きずなFプロジェクト」も七ヶ浜の力になれることを日々考えています。RSYの方々の支援は、私たちの活動をするにあたって大切なものになっており、きずなハウスは、私たちの活動拠点であり大切な場所です。私たちは、町内での紙芝居上演に力を

入れてきました。その際、RSYさんにきずなハウスの一角を貸していただいたり、たくさんアドバイスをいただいたりして、町内3ヶ所の小学校と幼稚園での紙芝居上演を実現することができたことを、ありがたく思っています。今後も、東日本大震災を風化させないために紙芝居活動をはじめとする活動に取り組んでいきたいと思っています。



きずなネット（グリーンサポーターズ） 千葉 有華さん

ファームガーデンでの活動には楽しい思い出がたくさんあります。環境大臣賞でいただいた木々や植物が根付くまでの数ヶ月、皆で協力して毎日水やりをしたこと。自生したよもぎを使っておやつを作ったり、ゴーヤカーテンを設置したり、防災かまどベンチで火を起こし子ども達と焼き芋を頬張ったことも楽しい思い出です。種から育てた藍の生葉染め体験では、畑や作

業場所を提供してくださった地域住民の方々へ感謝の気持ちです。また、私が持っているガーデニング講座をファームガーデンで行い、お日様の下で寄せ植えをし、とても気持ち良く、参加者も皆さん笑顔でした。七ヶ浜はとても魅力の詰まった宝島だと再認識し、これからもきずなハウスとファームガーデンの成長を楽しみにしております。



きずなハウス利用者 市川 蓮くん

きずなハウスに入ると、みんなが笑って「いらっしやいませ」と言ってくれて、ぼくは元気になるから大好きです。一番のお気に入り、スマートボールで、ビー玉が全部入った時は、つかみ取りとジュースをもらい「やった！」と嬉しかったです。ポーちゃん焼きが当たると1個もらえるので、ぼくはいつも好きなつぶあんを選びます。イチゴミルク味のポーちゃん焼き

があるといいな、と思います。駄菓子、きなこぼうが大好きです。なぜかという、当たるともう一本もらえるからです。6本続けてあたり「運がいい！」と思いました。ホッピングやハンモックでも遊べるし、本もたくさんあります。きずなハウスにまだ来たことのない人は、元気になるのでぜひきてください



きずなハウス利用者 中村 晴美さん

昨年の夏頃のこと、「そのきずなハウスさん、コーヒー1杯100円で、しかもなかなか美味しいんですよ！」と耳寄りな情報をいただき、早速立ち寄ってみることにしました。その日はコーヒーとポーちゃん焼きのクリーム味を注文し、お喋りしながらしばらくのんびりさせてもらいました。他に駄菓子も売っていて、スタッフとのやりとりを楽しむように母子連れや子ども達が次々に訪れていました。その雰囲気には

心が温まり癒されました。町内外の情報掲示板もあり、私のチラシも置かせていただきました。それからきずなハウスに時々顔を出し、友だちにお土産でポーちゃん焼きをご馳走したところ、そのご主人が買いに来てくれたという話を聞いて、とても嬉しかったです。皆さんも気軽にのぞいて味わって楽しんでくださいね。



七ヶ浜町立向洋中学校校長 大槻 泰弘さん

レスキューストックヤードの皆様には、9年間の長きにわたって継続して支援をいただき、感謝に堪えません。教育活動に携わる身として、この支援活動が七ヶ浜町の子供たちにとってどれほど大きな心の拠り所となっているのかわかりません。特に「きずなハウス」での様々な活動では、正に人と人とのきずなが生まれ、育ち、きずなの輪が大きく広がってきました。何気なく言葉を交わして談笑することができる場があることが、どれほど子供たちに安心感を与えていたかはこの活動の広がりを見れば一目瞭然です。

本校では、Fプロジェクトという組織があります。部活動に所属しない組織でボランティアを志す有志団

体です。「きずなハウス」の活動は、このプロジェクトが立ち上がるのにも大きな影響力を与えていると伺っています。FプロジェクトのFは、「復興・ふるさと・フューチャー（未来）」の頭文字であります。Fプロジェクトのメンバーは、きずなハウスで活動を重ねながらボランティア精神を培い、中学校を卒業して高校に進学してからも、復興活動を継続しています。

子供の存在そのものが未来への可能性そのものです。子供たちに元気と希望を与えていただいているレスキューストックヤードの皆様、改めて御礼を申し上げますとともに敬意を表します。



東北大学教授／多元物質科学研究所所長 村松 淳司さん

東日本大震災から9年。この間にも熊本地震や北海道地震、中国・四国地方や九州北部の大水害、そして昨年の台風など、連続して多くの自然災害が日本を襲っている。未曾有の災害を乗り越え、人々に「きずな」をもたらすRSYの継続的・持続的な支援はとても尊く、そしてとっても深い。「平家物語」に由来する『人々の「きずな」』。広辞苑では『断つにしをびない恩愛。離れがたい情実』、大辞林では『家族・友人などの結びつきを、離れがたくつなぎとめているもの』とあり、人が人として生きていく上でとても大切

なもの。新型コロナウイルスの時代では「きずな」を否定するかのようなSocial Distanceを要求するが、それも考えようだ。類義語「ほだし」。『情に絆される』とか言う。大辞泉では『情に引きつけられて、心や行動の自由が縛られる。』などと、うまいことを言う。精神的な「ほだし」ならSocial Distanceは気にならない。RSYの七ヶ浜での支援は、新型コロナウイルス感染症の時代でも十分に生かされていくに違いない。



中学校教員／元七ヶ浜町立向洋中学校教員 瀬成田 実さん

2020年3月に行われた事業評価会議では、国や県からの支援が終了する2021年度以降の活動や運営について議論を行った。私は、2015年度から3年間、向洋中「Fプロジェクト」の指導を行い、2018年度からは向洋中卒業生による「きずなFプロジェクト」をサポートしている。震災紙芝居で高い評価をいただいているきずなFプロは、きずなハウスが根拠地。ユコリン、ヨコチンはじめRSYの方々の支えがあったから

こそ、このステキな取組が実現し、彼らが大きく成長できたと信じてやまない。ハウスが、スタッフが誰もいない箱モノになる……。それはあり得ない。私の中では、きずなハウス=RSYである。

ハウスは、子どもたちの笑顔と歓声があふれる場所として、町民の交流拠点として、長く存続してほしい。町には支援を強くお願いしたい。微力だが、私も力になればと思っている。



特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター コミュニティ・ワークス

青木 ユカリさん

2020年は忘れがたい年になりそうです。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、これまでにない経験を味わっています。緊急事態宣言のもと自粛が続く、人との出会いや触れ合いがここまで制限されたことはなかったのではないのでしょうか。

「七ヶ浜みんなの家きずなハウス」は、みんなでワイワイ、集まったり、おしゃべりしたり、元気になれ

る場所。新しい生活と言われるなか「きずなハウス」はどう進化していきましょうか。しばらく伺えておりませんが、ファームガーデンの様子も気になるところです。またお邪魔させていただきますね。

2019年度七ヶ浜スタッフ



きずなハウス前のファームガーデンは、雪柳の花が満開に咲き色鮮やかなチューリップも開花し、華やぐ季節を迎えました。しかし、世界を震撼させた新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月上旬からきずなハウスの営業は臨時休業となり、この影響で、駄菓子やポーちゃん焼きをお目当てに来てくださる方、勉強やゲームをしに来てくれる子ども達とのふれあいができなくなりました。残念でたまりません。

そんなおり、住民の方々から「ポーちゃん焼きを早く食べたいなあ」「いつまで休み？」など再開を待ち望んでくださる声が届き、とても嬉しく思うと同時に、一日も早く営業が再開でき、いつもの賑やかな光景が広がることを願ってやみません。そして、これまで以上に、きずなハウスに来てくれる住民の方々の憩いの場として、幅広く利用していただけるように頑張っていきたいと思えます。

— RSY 七ヶ浜スタッフ —

渡邊陽太 鈴木寧々 矢内健一
石木田裕子 最上真実 赤間としえ 横田順広

「七ヶ浜 みんなの家 きずなハウス」がつむぐ人と人との絆

何事もなかったかのようにきらきらと碧く輝く海を見下ろす町の中心部に「七ヶ浜 みんなの家 きずなハウス」は誕生した。この建設にあたっては、サークルKサンクス（現ファミリーマート）による東北の子どもたちに幸せな笑顔を贈る店頭募金の趣旨に賛同した無数の人々の善意と、震災で失った「場」の再生を願った日本有数の建築家や賛同した若き建築家らによる「みんなの家ネットワーク」その活動に賛同し寄付をしたロレックスとの協働により実現した。さらに、それを支えた町内外の市民・ボランティア・NPO・企業等、そして七ヶ浜町の理解と協力によって成し得ることができた。

東日本大震災でどれほど多くの涙が流されたかは計り知れない。今でも涙があふれることはある。これからも涙をこらえられない時もあるだろう。しかし、その涙を明日への生きる力についでいこう。この場所が、ここに生きる子どもからお年寄り、そして町を訪れる人々みんなの家となり、大いに語らい、大いに交わり、人と人との「きずな」の交流拠点となることを願う。

2017年7月21日。今日がこの願いの記念日である。

文：レスキューストックヤード



特別協賛 ROLEX	建築設計 株式会社近藤府屋建築設計事務所 構造設計 金田光弘 櫻井克雄 設備設計 渡野彰 外構設計 株式会社グリーン・ワイズ 施工 株式会社シェルター	協賛 AGC硝子建材株式会社 TOTO株式会社 大光電機株式会社 オスモエーデル株式会社 株式会社デツヤ・ジャパン	YKK AP株式会社 株式会社サンゴツ トーソー株式会社 SHEBALURA HOUSE 伊東薬花 千世 (徳和町)	企画 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 特定非営利活動法人 HOME-FOR-ALL 七ヶ浜町
----------------------	---	---	--	--



認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
東日本大震災 被災者支援
2019 年度 活動報告書

2020 年 6 月 30 日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya

七ヶ浜みんなの家きずなハウス

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山 5-9

tel 090-9020-5887

facebook rsy.kizuna